

令和7年度（2025年度）第1回熊本市教育の情報化検討委員会 会議録（要約）

1 日時 令和8年（2026年）3月24日（火）14時30分～16時30分

2 場所 熊本市教育センター 4階 大研修室

3 出席者 【委員】

熊本大学教育学研究科 教授 大塚 芳生 委員長

熊本大学大学院教育学研究科 特任教授 前田 康裕 副委員長

熊本県立大学総合管理学部 教授 飯村 伊智郎 委員

熊本県立大学総合管理学部 准教授 本田 藍 委員

崇城大学総合教育センター 准教授 溝上 広樹 委員

九州ルーテル学院大学児童教育専攻 講師 赤井 秀行 委員

熊本保健科学大学学生相談・修学サポートセンター 講師 岩村 純子 委員

熊本市PTA協議会副会長 中村 理絵 委員

熊本市PTA協議会副会長 村上 弥生 委員

熊本市立若葉小学校長 坂本 多代 委員

熊本市立健軍小学校 養護教諭 工藤 あけみ 委員

熊本市立五霊中学校 教諭 堤 大輔 委員

【熊本市（事務局）】 教育センター 指導課 健康教育課 総合支援課

4 配付資料

会次第

座席表

資料1 熊本市の現状

資料2 アンケート結果

資料3 自由討議

5 次第

(1) 開会

(2) 委員紹介

(3) 事務局挨拶（遠藤教育長）

(4) 委員長・副委員長選出

(5) 議事

①熊本市の現状

②タブレット端末の活用状況に関する実態調査結果報告

③自由討議

- 各委員より
- 自由討議
- 第 2 回・3 回の内容検討

(6) 事務連絡 次回日程等

(7) 閉会

6 議事の内容

開会 (事務局)	<p>ただいまより令和7年度第 1 回熊本市教育の情報化検討委員会を開会いたします。</p> <p>委員の皆様におかれましては、ご多用の中、熊本市教育の情報化検討委員会の委員を引き受けいただき、また本日もご出席いただきまして誠にありがとうございます。</p> <p>それでは委員の皆様をご紹介します。</p> <p>熊本大学教授大塚芳生様です。</p> <p>熊本大学特任教授前田康裕様です。</p> <p>熊本県立大学教授飯村伊智郎様です。</p> <p>崇城大学准教授溝上広樹様です。</p> <p>熊本県立大学准教授本田藍様です。</p> <p>九州文学院大学講師赤井秀行様です。</p> <p>熊本保健科学大学講師岩村純子様です。</p> <p>熊本市 PTA 協議会副会長中村理絵様です。</p> <p>熊本市 PTA 協議会副会長村上弥生様です。</p> <p>若葉小学校校長坂本多代様です。</p> <p>五霊中学校教諭堤大輔様です。</p> <p>健軍小学校養護教諭工藤あけみ様です。</p>
定足数等 (事務局)	<p>本日は 12 名中 12 名の委員が出席されており、議員総数の過半数の方が出席されていることから、検討委員会は成立することを報告します。</p> <p>開会にあたりまして、遠藤教育長が委員の皆様にご挨拶を申し上げます。</p> <p>【教育長 開会の挨拶】</p>

	<p>【事務局の紹介】 教育センター、指導課、健康教育課、総合支援課が参加いたします。</p> <p>【委員長・副委員長選出】 本検討委員会の委員長を熊本大学教授大塚芳生様、副委員長を熊本大学特任教授前田康裕様をお願いします。 委員長が議長となりますので、進行をお願いします。</p> <p>【①熊本市の現状②タブレット端末の活用状況に関する実態調査結果報告】</p>
<p>議事 大塚委員長</p>	<p>事務局から熊本市の現状と、タブレット端末の活用状況に関する実態調査結果について説明をお願いいたします。</p>
<p>事務局</p>	<p>事務局より資料1、資料2について説明。</p>
<p>大塚委員長</p>	<p>【③自由討議】 自由討議の内容について説明をお願いします。</p>
<p>事務局</p>	<p>資料3について説明。 学習面生活面、健康面の3つの支援に加え、学年や発達段階による学習用学習者用端末、タブレットの活用に関してご意見をお願いいたします。</p>
<p>大塚委員長</p>	<p>全ての委員の方々からの意見を自己紹介を含めて、5分以内でお願いします。皆様がどんなリソースをお持ちなのかというのを知りたいと思いますので、忌憚のないご意見をお願いしたいと思います。 もう1回おさらいしますと、事務局からありましたように学習面、授業改善についてと、生活面については、家庭を含めた使い方の指導というところですね。3つ目に健康面ですね。使用時間等について心配なところもあるなと思いましたので、学年や発達段階に応じて意見をいただきたいと思います。</p>
<p>溝上委員</p>	<p>崇城大学の溝上と申します。普段は、アントレプレナーシップ教育に携わっておりまして、探究活動支援をしています。高校の先生方に対する研修や教職員支援機構のNITSフェローとして九州地区の先生方の、研修観の転換に向けた探究型研修等に取り組んでおります。どうぞよろしくお願い</p>

いたします。

私からは、まず学習面に関して、実態調査等を拝見し、熊本市の取り組みが全国的にかなり先進的な段階にあるというのを改めて感じたところです。

特に私が気になったのが生成 AI の校務活用が、令和 6 年時点で全国平均をかなり上回っており、環境整備に加えて、先生方の実践を後押しするような取り組みがなされているんだらうなと感じたところです。また全国学力調査と学習状況調査等に関しても、おおむね全国と同様の動きを見ていることから、ICT の活用が進む中でも従来の学力指標において大きな課題が見られないという点で、教育委員会ももちろんですけども、現場の先生方の不断の努力や、児童生徒の頑張りが見て取れて、前向きな結果になっていると思いました。

その上で 3 点話したい点がありまして、1 点目はアンケートの回答についてです。先ほども説明の中であった、書く力の捉え方の「どこを聞いてるんだらう。」という話が私も気になりました。いわゆる文字を書く力なのか、筆圧なのか、それとも思考を整理し表現をする力なのかということだと思います。おそらく回答者の捉え方によって結果が変わる感じたところです。

その上で、ICT 活用の中でも、表現する機会というのが一定以上確保されている結果を踏まえると、活動の中で、いわゆるこの思考を整理し表現するという機会は、かなりの先生方が取られているんじゃないかなと思います、多面的に今後見ていく必要があるかなと感じたところです。また、関連してオン、オフの切り替えについても、こちらは授業中に限定するとおそらく日本の先生方は、切り替えはうまくできていると思っています。OECD の調査でも全調査結果の中で見て、日本はデジタル機器で注意散漫になる割合がかなり低いという結果が出ており、指導を授業の中でされていると思います。おそらくタブレット端末だけでなく、スマホを合わせた、家庭での使い方のオフというところが結果に混ざっているのではないかなというのを少し感じたところです。

2 点目は、発達段階に関してです。基礎的な情報活用スキルについての整理に関して、毎年見直しをされていることで、かなり素晴らしい取り組みをされていると感じました。また全体としても分かりやすく整理されていると思いました。

その上で、今後より良くしていくためにはという視点では、おそらく熊本市の現場では、教育委員会主導後に、それぞれの現場での取組がかなり進んでいることが予想できるなと思います。すでに取り組みされているかも

<p>本田委員</p>	<p>しれませんが、現場の実感や実態を反映させるようなプロセス等が今後重要になると思った次第です。こちらが意図しないようなところで、先生方とか児童生徒たちが工夫しながら、端末をうまく組み合わせながら活用している場面等があるのではないかなと感じました。</p> <p>あと最後 3 点目のモデルカリキュラムの進め方に関しても同様で、熊本市の端末は学習基盤としてかなり整備が進んでいて、先生方を後押ししているというのがすごく伝わります。この中で例えば、子どもたちのどの発達段階で、タイピングをさせようかといったこと等、現場の中で試行錯誤されながら実践値が溜まってきているところではないかなと思いました。これらも、何か可視化するような、質的な分析ができるようなことができればいいかなと感じたところです。</p> <p>とはいえ、先生方の負荷を上げるわけにはいきませんので、例えば先生方へのインタビューや、児童生徒の学習活動の振り返りの中で、自分自身はどういうふうに活用して、何が出来るようになったのか等については、書いたりしているものがあるのではないかなと思います。そのようなものも拾いながら、現場の負荷を上げないような形で可視化することで、横展開できるようなものができれば、説得力があるデータの一つになるのではないかなと感じた次第です。以上となります。</p> <p>熊本県立大学で社会調査法を教えております。本田と申します。よろしく願いいたします。私は社会調査法を教えているんですけど、社会調査法ってアンケートだったりとか、そのアンケートから得られたデータを分析したりとか、統計的な分析をやったりとか、そういうようなところをやっております。その後関連して、昨年度まで熊本市役所の都市政策研究所ってところで、こちらのタブレット端末を使うことによって、どんな効果があるのかとか、またどういう風にデメリットがあるのかみたいなところも、先ほど出てきた学力学習状況調査の結果をいただいて、少し分析をしてみたところでした。</p> <p>今年度もたくさん調査をしていらっしゃるって、特にこちらの端末の活用状況に関する実態調査を結果のご報告書を作られていて、タブレットにどんな効果があるのかとか、さっき教育長がおっしゃっていたような果たして本当に子供たちの役に立っているのかいうところを検討するためのデータが集まっていると感じました。</p> <p>討議の内容の学習面と生活面と健康面をこういったデータからおそらく意見・協議していくことになると思うんですけど、いろんな項目でアンケート調査していただいている、いろんな課題だったり、成果が抽出さ</p>
-------------	---

れていると思うんですけど、アンケートのその今おそらく単体の結果しか出ていないので、果たしてこれが本当にタブレットを使ったせいで、目が悪くなっているのかとか、その結果、原因が本当にタブレットにあるのかどうかというところが、少しまだ見えない状況かなと思いますので、今後はそのタブレットがどの程度影響して、視力に影響があるのかどうかとか、そのあたりと健康に対しても、アンケートをせっかく取られるのであれば、そういったところの影響もあの検証ができるといいのかなというふうに思います。

それからおそらく教員の方にもたくさん質問されているんですけども、どのような。特色のある教員の方が、授業改善に寄与しているかと思っているのかとか、あるいは寄与していると思っていない先生はどのような特徴があるのかとか、そのあたりもよりそのタブレットをよりよく使うという意味では、すごく参考になる情報になるかなと思いますので、そのあたりも検証していけるといいのかなというふうに感じました。

最後に今日ちょうど同じ県立大学の女性の熊本市にお子さんがいらっしゃる先生と、このタブレットの話になったんですけど、その時確かにあのタブレットすごく重いつて、子供たちが言っているっていう風に、話題になっていて、まさにこちらに書かれているあのことが保護者の実感としてもあるんだなっていうふうに感じました。もしかしたら、高学年の子たちにとっては持って帰るのは軽いけど、小学 1、2 年生の子供たちにとっては、すごく重いみたいな相対的なものがあるかなというふうに思いますので、持って帰る必要性が果たして、その小学 1、2 年生にあるのかどうかとか、そのあたりも検証するといいのかなというふうに感じました。以上です。

赤井委員

九州ルーテル学院大学の赤井と申します。大学では、主に小学校教員養成課程で指導しておりまして、もともと大阪で小学校教員をしており、現在は九州ルーテル学院大学に着任して 5 年目になります。研究領域は算数数学教育を専門としており、その中でも教育工学、特に ICT の活用と算数数学教育を結びつけた実践研究を行っています。平たく言うと小学校で何か工夫をした授業をして、子どもたちに学習をしてもらって、その結果、子どもたちがどういった学びのアウトプットを得たのかを分析して研究することを主なテーマとしています。もう一つ、熊本県内の先生方と国際的な研究として、シンガポールと台湾の先生方と共同研究もしてまして、シンガポールや台湾の先生方と日本の先生方が一緒に授業づくりをしたらどういった風に先生方が変わっていくのかといった研究も進めていま

す。

そういった研究を踏まえてお話を今日聞かせていただいたので、比較的学力面の話が中心になるかと思うんですけども、まず聞かせていただいて、こういった新しい学び方を取り入れた時に、その3年や5年でうまくいくわけは当然なくて、まずここまでは、すごく整備を熊本市は先進的にされてきて、ICT環境が整備されているというのは事実だと思います。その結果、様々な先生方がいろいろな使い方を模索して行って、いろんな使い方を考えてきた。そういった実践を積み重ねてきた。それで、結果は、このアンケートの中であったような、例えば協働的な学びとか、個別最適な学びが、充実しているというのは事実だと思います。

ただ一方で次のフェーズを考えた時に、この個別最適な学びとか協働的な学びは、目的ではなくて、学び方であって、つまり「どのように学ぶか」という方法な訳ですよ。どう学ぶかという方法なので、方法がいいのか悪いのかという議論は、目的に対してその方法が適切かどうかという議論をしなければいけない。じゃあこの目的とは何かということになると、もちろん最初教育長からもあったように、非認知能力とか、いろいろあるんだけど、平たく言うと、例えば算数の学力だったり、国語の学力、つまり「ICTを使ったら算数が本当にできるようになったんですか。」ということですね。算数もしくは、国語、理科、社会、図工、体育、音楽もその教科で追求したい本質を子供がどう学んだか、その時にこのICTという方法が適切だったかという議論になるので、次の段階に移るわけですよ。これが次のフェーズで、またそういった目的とのつながりとなった時に、じゃあ今の熊本市はそこで十分なのか次の課題だと思っています。

ですので、今後、教科指導の研究とICTを活用した新しい学び方に関する研究を、現場レベルで両立して進めていくことが大切になっていくのではないのでしょうか。

元々のGIGAスクール構想が出てきた時も、日本には様々な先生方のこれまでの実践知の蓄積がある。それとテクノロジーのベストミックスということでスタートしたのですが、今の段階は、新しいICTをどう使ったら、こんなこともできるよ、例えばAIを使ったらこんなこともできる、ロイノートを使ったらこんな見せ方もできるというところにとどまる。これまで日本が150年間積み重ねてきた教科教育の素晴らしさ、これやっぱりどの国の授業や学会に参加しても、やはり日本の教科教育のすごさは評価されているところで、そういった教科教育の実践知と、今熊本市が全国に先駆けてリードしたこの5年間余りの使い方をどう結び付けるかとなったときに、やっぱり現場の先生方の、教科教育の視点から、ICTを

<p>岩村委員</p>	<p>どう見るかということに、フェーズを移していくことが必要なのかなというのを、自分たちが学生指導を普段している中だったり、また、学生と一緒に熊本市・県内の様々な学校で実践研究させていただいているんですが、そこでの先生方との議論の中でも感じています。ただ、そういった息吹というか、先生方の芽はあるので、それをきちんと評価して、もっと広げていくということができればいいのかなというふうに思います。</p> <p>熊本保健科学大学で学生相談・修学サポートセンターでオーガナイザーをしております。岩村と申します。私は看護師の免許他、臨床心理士、公認心理師を取得しており、今回心理士の立場で参加しております。</p> <p>まず学習面に関して、学びの多様化と言われるように、大学でも多様な学生に対し、様々な授業の支援にも ICT が活用されています。タブレットを早期から使っているということで、学びの多様性に寄与していると思います。もちろん個別に合う、合わないはあると思いますが、様々な対話の手段にもなり学びが可能になっていると思っています。そして、特に小学生は ICT 機器を扱うというだけで、勉強に対するモチベーションが上がると思います。一方で、過集中になってしまい、その切り替えというのは難しい発達段階にあると思います。ただし、やる気をしっかり引き出すことのメリットも大きいと思います。</p> <p>生活面では、これは今回のタブレットの影響とすることは断言できませんが、これだけスマホが普及して、スマホ以外にも自分で使える端末を持っていることを見て驚きであり、これらを用いたいじめの問題等に発展をしないか懸念します。ただ、このタブレット端末でそれが起きているかっていうというより、やはりスマホの影響が大きいと思います。もちろん撮影機能や共有機能もありますので、デメリット、メリットがある中で使うためのルール作りが大切と思いました。この点、学校のリーフレットを見せてもらいましたが、しっかり取り組まれているなと思いました。あと、もう一つはコミュニケーションについてです。こういった端末を使うことで、いろんな共有の中で、アウトプットで発表したり、コミュニケーションの場面というのは、いろいろ工夫をされていると思います。しかし、今、大学生を見ていてコミュニケーションの困難さは課題になっていると思っており、その影響も考えながら聞いておりました。</p> <p>最後に、健康面に関して、今回のデータには、睡眠の状況がなかったのので、児童生徒の睡眠の状況があるとよいと思います。これだけタブレット端末ほかスマホ等使用している現状を見ると、やはり気になるところではあります。実際に夜遅くまで使って、結果、朝起きられない。そしてそれ</p>
-------------	---

<p>坂本委員</p>	<p>が不登校につながっていく現状等もあるかと思しますので、関連づけて見ていければと思います。私から以上になります。</p> <p>若葉小学校校長 3 年目になります。最初に教育長が「役に立っているのか」ということがあったんですけども、実際 6 年生は卒業するというので、2 月の末ぐらいにもうタブレットを引き上げられたんですね。その後の 15 日弱ぐらいは何も無しの状況で過ごす時期があって、とても子供たちも困り、先生たちも困り、もう普通に生活の中で当たり前にあっただなっているのもすごく実感しました。便利ってということと、やっぱり共有するのが一度にできるとか、あと委員会活動でも普通に使っていたので、日常のものなんだなっているのは改めて感じたところです。</p> <p>私からは広くあるんですけども、2 つだけに絞ってお話したいと思います。1 点目が学力との関係というのが一番学校として頑張っていかなきゃいけないところだっているところ、授業作りなんですけれども、学調の問題が国語も算数も情報をどのように取ってきて、どう組み合わせでどう表現するという、「情報」を扱っています問題自体がですね。算数もそうです。だからその読み取る力っていうのが教科の中でも必要なんですけれども、情報と情報をただ持ってきたってだけ、それを組み合わせで生み出す力っていうのは、やはりタブレットでやることでの効果っていうのはとてもあると思うんですね。ただ、やはりそういう力を伸ばしましょうっていうのが、正直教員によって差があるっていうのが、私たちの反省しないといけないところかなと思ったところです。</p> <p>では、それをどうするかって思った時に、センターからモデルカリキュラムが出ている中で、スキルについても、昨年度出された 2024 年度版は細かく段階を追って低学年・中学年・中学生という、ここまでしましょうというのが出されていました。それで、学校もそれは担当が見て必要ですよっていうところで、正直すいません若葉小はそこまででちょっとストップしていたところがありました。それを 1 年間やってみて、どうだったという振り返りまできちんと積み上げていなかったというのが私自身の反省です。そういう指標をきちんともう 1 回見直していくことが大事だな。そうするためには、授業作りも校内研の中でやっていくっていうのが、大事だなと思っているところです。</p> <p>2 つの視点の 1 つは、ルールの部分なんですけれども、学校でのルールというところでお話しますと、今年度新しくこのタブレットになって、タブレットの切り替えというのは、とてもチャンスだと思っていました。前まで使っていたものが 3 年いる中での 1 年目 2 年目は、どうしても前</p>
-------------	--

堤委員	<p>は「良かった」という自由な使い方がとても多かったです。でも、それを制限すると係活動や委員会活動でのタブレット活用が制限されてしまうので、どうしたものかなと思った時に、新しいタブレットが来たときに、教育センターが「タブレット開き」を準備してくださったのをきっかけに「学級開き」と同時に「タブレット開き」をしました。1年生は6月ぐらいからスタートなので、その時に「タブレット開き」をするんですけども、ホーム画面に「タブレット開き」と名前を書き入れた「若葉っ子のタブレットの決まり」がホーム画面を開けたらすぐ出るようにしています。それ以外のことをしていたら、「あっ違うよ。」と注意して、その中にはお互いを大事にするということが書かれています。</p> <p>YouTubeも見られなくなっただけというのも、きっかけかもしれませんが、大幅にギガ数が超える子たちも減って、今はそこまで問題はなくなっています。ただ今年度課題が出てきたのが、係活動をやる時に、いろんな動画とかも面白く撮って、学級を盛り上げようという時に、友達の写真を撮って、加工したというようなことがありました。そこで、すぐにダメということではなく、考えるチャンスということで、子供たちとも考えて、来年度はその決まりをどういう文言で入れていくかは教員が考えているところです。そういうことをすると、相手がどう思うとか、その失敗をじゃあ次のチャンスに変えるためにどうしようっていう、そういう学びの場でもあるととらえています。授業作りと学校でのルール決めというところでお話しました。</p> <p>五霊中学校で技術を担当しています。堤と申します。よろしくお願いいたします。私は生徒指導も担当しております。タブレットを技術の授業でも使ったり、総合的な学習のときなども使ったりしていますが、私の方からは学習面と生活面、家庭への啓発等をお話させていただきたいと思います。</p> <p>学習面ですが、生成 AI を校務で使うという話がありましたが、授業でも生成 AI を使えないかということも、技術分野の中で研究員として研究していました。現在は、生成 AI を生徒が本格的には使えてはいない状況です。生成 AI を生徒が使うためには手続きが必要であり、本格的には取り組んでいないのですが、生成 AI を使って、生徒が自らの思考をどのように深め、生成 AI の助言を受け入れるだけではなく、批判的思考や、根拠を持った発信など、生成 AI をどのようにして深い学びに繋げられるかということの研究していました。まだ研究途中ですが、技術だけでなく、それ以外の教科でも生成 AI が使えるのではないかと考えています。一方、この資料の中で、中学校でタブレットを使って生徒同士がや</p>
-----	---

り取りする場面の割合が非常に少ないというデータがあったと思います。中学校では「ロイロノート」を使って生徒同士で共有したり、提出してみんなでそれを確認したりすると思いますが、生徒同士でやり取りする場面では、共有のロックを教員側が解除する必要があります。その時に問題になってくるのが、共有時のトラブルとか、結構先生方から話をされます。そのような不安から共有する場面がちょっと少ないのかなというの、感じたところでした。教員がタブレットを使用した効果的な授業をどのように組み立てていくかを考えていくことが重要なのかなというところを感じたところです。

あと、生徒が学習用端末じゃなくて、家庭用での端末を多く持っている。90 パーセント以上の中学生が持っているというデータがあったと思うんですけど、実際に起きた事例としては、生徒のスマホを学校に持ってくることは禁止していますが、学習用端末で撮影したものを自分のスマホに落として、それを SNS にあげる。というのが実際にありました。もちろん家庭へのスマホの使い方というところの啓発も必要なんですけども、本校では、その行為がどのような法的なことにつながるのかを専門家の方をお呼びして、講師をしていただき、授業していただくのを本校では 5 回行いました。1 学期に通信会社の方をお呼びして、講話をしていただいて、その後、弁護士の方にも来ていただきました。あと教員が夏休み前に 1 回行いました。2 学期には警察の方に来ていただいております。先日は、教員が 3 学期におこないました。あと新入生の保護者の方向けには、通信会社の方に来ていただきスマホの使い方に関する講話をしていただきました。教員だけで情報関係の指導をしていくというのはなかなか難しいと思っています。もちろんこの学習用端末に関しては、きちんと私たちが指導していかないといけないんですけど、家庭用端末も含めて、法的なところとか、今の社会の現状とかも含めたところで、そういう専門の方にも来ていただくっていうことも、これから必要なんじゃないかなっていうのが、私自身感じています。以上です。

工藤委員

健軍小学校で保健室に勤務しております。工藤と申します。健軍小学校 4 年目になります。私は養護教諭ですので、主に健康面の意見を話させていただけたらと思っています。今日はタブレットの使用についてのいろいろな側面について、話し合いをしましょうという会議なんですけれども、ここで示されたように、タブレット以外にも自分が使えるスマホの所持率が 1・2 年生でも 70 パーセント近くもあるんだということで改めて驚いたところです。これだけの所持率がある中で、先ほど岩村先生も言われてい

たように、視力の問題もこのタブレットだけの問題なのかちょっと難しいなという風にまず思いました。

教員のアンケートから見ても、一番視力の面が心配というような声が多かったんですけど、おそらくこれは保護者の方もそうじゃないかなというふうに思っています。実際、実態を見てみると、そこまで極端な低下はないということだったので、そうなんだなというふうに思ったんですが、全国的な傾向でもあるんですけど、なだらかに少しずつ1.0未満が増えていっています。これは、もう時代の流れなのかなというふうにも思う一方で、「視力が落ちたら、メガネやコンタクトをつければいいでしょう。」という考え方もあるんですけども、やはり将来目の病気例えば、白内障、緑内障、網膜剥離とかですね。そういったリスクはあるんだという将来の子供たちの健康というものも、私たちは考えて引き続き保健指導をしていかなきゃいけないなというふうに思っております。

日本眼科医会さんから出たデジタル時代のタブレットと上手に付き合いましようというのが分かりやすく、アニメで描かれているものがあり、それを健康教育課の方から学校に紹介をしていただきましたので、私もそれを使って保健室で保健指導したり、あるいは校内でいろんなところに掲示をしたりしています。子どもたちにもわかりやすいです。3つの大作戦というようなものです。まさにここで問題になっているように、まずは姿勢の問題です。タブレットがちゃんとこうやって立てる形になりましたので、立てて使うのが一番いいんですけど、子供たちが中身をどうしてもこうやって覗き込んで、机に置いているんですね。覗き込んで使っていて、いろいろな姿勢の子供たちもいます。まずはきちんとした姿勢指導をしていかないといけないな、というふうに思っているところです。

もう一つは30分使ったら20秒外を見ましようとか、目を休めましようとかですね。そういった目を休める休憩時間というものの、それに合わせて外遊びをしっかりとやりましよう。というものを眼科の先生たちもおっしゃっています。外に出て遊ぶと紫外線が近視を予防すると書いてありますので、視力の問題と、体力の問題その両面も大事かなと思っています。私は、たまに校内を回ったりするんですけど、外で一生懸命遊んでる子はたくさんいるんですが、やはり教室の中でずっと残って、なぜかしらタブレットを見ているという子供たちも少なからずいるんですね。学校ではタブレットの使用の決まりというのを作っております。「休み時間には体調の悪い人以外は外に出て遊ぼうね。」ということを言ってるんですが、例えば委員会活動とか、学習とか係活動で使う場合は、担任の先生の許可を得て使うことはできるというふうな決まりになっています。

村上委員	<p>ただそれもだんだんなし崩しになってきて、どれだけの人が何を見てるのかなっていう感じですね。好きなアーティストのことをみている子供もいます。本校でも毎年決まりに対してどれくらいできたかなという、振り返りをしていかなきゃいけないよねということで、この前生徒指導部会で来年からは、タブレットを開けた時に、タブレットの約束がパッと見えるように、名前をきちんと書く欄を設けて、開けたら名前も出てくるという形に決まったところです。視力の問題だけじゃなく、体力などの面も一緒に考えていく必要があるのかなと思いました。以上です。</p> <p>私は、北区の龍田西小学校の PTA 会長を 5 年ほどさせていただいて、そして、19 日の日に卒業式を迎えて、もう数日で私は会長ではなくなるんですけども、今日は、龍田西小学校の PTA 会長として、また、市 PTA の副会長として、皆様方のような専門的な知識は全くない中で、もしかしたら的外れなことになってしまうかもしれませんが、一保護者として、述べさせていただければと思っております。</p> <p>私は、子供が 4 人おりまして、上が 25 歳、24 歳、20 歳、そして 12 歳と一番下の子が今年卒業したわけですけども、まず学習面の方からお話させていただきますと、一番上の娘の時にはタブレットはありませんでした。お家にパソコンを持っている人とか、タブレットを持っている場合は、扱ったり、携帯を持っている場合は扱うけれども、学校ではそういうパソコンがあるお部屋に行って使うような感じでした。2 番目も同じような感じで、3 番目、今年 20 歳で成人式を迎える娘の時には、中学校からパソコンを与えられてですね。小学校の時もだったかな。実際触るようになってくるとですね。それが今 20 歳になった時と、そして上の子たちが 20 歳になった時と比べた時には、使えるその技術っていうんですかね。全く違うんですよ。なので、今でも上の娘はパソコンで何かをやってというのは会社でしかしません。あとはもう携帯でちょっと検索したり。あんまり娘がちょっと独特なのかもしれないですけど、そういうネットとかいうことにあんまり関心がない、調べるためのツールとして使っているような感じです。</p> <p>どっぷり使っている息子は、とにかくタブレットだったり、パソコンだったり、インターネットに向き合っている時間がとても楽しそうな感じですよ。もちろん時間は長くなってくると、私は親ですので、「ちょっと時間が長いんじゃない。」って言うと渋々閉じるんですけど、ちょっと席を離れると、また開きますよね。それを自分で管理してもらえるところまで、見守るといふところを今も繰り返し続けているところです。でも、</p>
------	--

やはりその先、その20歳ぐらいの年齢の子供たちを比べてみると、やっぱりこう扱えて何かを調べたり作ったりする時に、少なからず基本的な技術があるのとないのでは、やはり能力的にも物事の進み方だったりも、とてもスムーズであるっていう違いは、私自身も感じているので、上手に今度は付き合っていける方法を親としてはどういう風に向き合っていったりいいのかなというふうに、今、息子を実験台じゃないですけど、いろんなことを試して行って、繋げていっているような感じです。

なので、何がいい、何が悪いとかっていうのを、このアンケート上で見せていただいても、あんまりピンとこないとかですかね。あの正直なところがですね。なんかピンとこないで、せっかくこのような貴重な場に参加させていただいてますので、そこを上手に吸収させていただきながら、また、我が子にそして、近くの子供たちに、手の届く子供たちにそういうのを伝えていければいいな、というふうに思ったところです。また、健康面ですかね。画面までやはり近いていうのはすごく私も気になっていてですね。大きくするのではなくて、自分が近づくっていう、謎の行動がどうしてそういうことになるのかと理解できないんですけど。だからこの暗闇でも、やっぱり近くで見るので、そういうところで、視力が下がっていったりとか、なんか、そういう風に繋がっていているのかな、というふうに思ったところです。

私は小学校にどっぷり浸かっている保護者なんですけども、なかなか子供がタブレットをどういう風に授業で使っているか、そのタブレット自体が実際どういう機能があるのかってところまで、把握されている保護者は、ほぼいないと思うんですよね。どうしてかっていうと、保護者が触る機会がないからです。タブレットを。例えばロイロノートで子供たちがピュピュピュって触ってますけど、保護者にですね。先生が送られてきたものを開いてみてくださいって言っても、開ける人ほとんどいらっしやらないんです。何がどうなってるのかわからないっていう。子供がピュって先生に提出したりとかするんですけど、今どこになんか流したみたいな。

これどこ行ったのみたいなレベルの保護者の方がほとんどなので、Zoomとかも、いいのかどうかはわかりませんが、例えば、総会とかをZoomでします。でもZoomっていう端末できる方が環境がない方は、お子さんのタブレットにZoomが入ってますので、そっちで入ってみてくださいって言っても。どこにZoomがあって、どうしたらいいのかわからないって言われる方がとても多いんですよね。それだけ大人は距離があって、子供たちの方が進んでるので、保護者と一緒にルールを決めまし

<p>中村委員</p>	<p>         ようと言っても、保護者がついていけないので、何が正しいところのルールなのか、だいたいわかりますけど、だけど、じゃあもっと踏み込んで子供たちと一緒にルールを決めていくっていうところに、私がどれだけついていけないのか、ついていけないことを表には出したくないので、やってるふうを醸し出すっていう。その繰り返しじゃないかなと思って、恥ずかしいことではないんですけど、それはやっぱり大人も子供たちと一緒に触って、こうなるから、こういう風なルールを決めようねっていう、そういう時間が私には欲しかったですし、欲しいと思ってる保護者の方は多分多いんじゃないかなと思っていますところ。       </p> <p>         あの今から中学に上がりますので、中学校の実情の保護者の話は、中村さんがしっかりお話ししていただけたらと思いますので、私からの意見は以上です。       </p> <p>         熊本市 PTA 協議会副会長の中村と申します。熊本市立託麻中学校で PTA 会長しております。中学校 3 年生の娘が 1 人です。いわゆる、長期決着者でございます。だから学校のタブレットを使っていたのを見たのは、小学校 6 年生の時にロイロで夏休みの宿題をしていたみたいなの、そのくらいが最後で、中学校 1 年の 9 月ぐらいから、行けて月に 1、2 回っていう状況でしたので、中学校から支給されているタブレットを使っているのを見たことがなく、ほぼほぼ開けてない状態のものをこの間卒業式までに返却しました。       </p> <p>         家庭用のタブレットは持っていました。それを使う時間は、やっぱり学校に行かないとすごく長いです。学校に行けなくなってから、学校の先生からドリルだとかドリルパークなど、そういうものを勧められたんですけども、開いて見て閉じるみたいな感じです。ただ、すごく本を読むんですよ。その中で気になったものを自分の端末、自分のタブレットで調べることをするんです。学校からのものは、ほとんど使っていないんですね。私がちょっとわからなかったことなんですけど、他のお母さんたちの話を聞くと、学校から与えられているタブレットを使って部屋にこもっていると、勉強していると思う。でもしていない。成績につながっていないのをよく聞きます。       </p> <p>         PTA の会長もしてまますけども、別で小学校の学校評議員もしています。学校評議員で授業参観を大名行列みたいに見てまわります。あの時って、もう子供たちピシャッとして。タブレットをパーンと広げて、先生たちも電子黒板で準備もして、授業に無駄な時間ないなと思いました。と同時に、やっぱり私ですね、ちょっと経歴がごちゃごちゃになれるかも       </p>
-------------	--

れないですけども、学習塾を経営していたんです。この間それは、中3の時に子供の同級生の学年で終わったんですけど。やっぱり最初の頃は、もう紙だらけだったんですよ。最近の子供たちは学校の宿題って言ってタブレットを持ってきているんです。そういう時代の変化をみてきました。

学校の先生の黒板に書かれる字はすごいです。実際書いてみたらあんなにうまく書けないんですよ。黒板の字って学校の先生すごいなと思って。この間の授業参観の時に電子黒板と国語の授業だったんですけど、国語の文章を先生が書かれて、さすが先生字が上手だという思いをしたんです。もう一つ民生委員をこの間、11月までしていました。主任児童員というのをしましたので、御幸小学校の巡回をしてるんですけど、その時って、子供たちは、リラックスしているんですよ。誰かおばちゃんたちが来ているぐらいの感じで、全然違うところを開けています。何を開けているのという感じ。そういう話しかけると、先生側からは見えませんよね。違うの開けてても、そういう現状があります。そういうことぐらいしか専門的なことがないので。ただ、坂本委員が言われた、委員会活動とかで使う創造的なものを子供たちがICTを使ってやるような、そういう風なものにはどんどん活用していただいて、学習面で言ったらやっぱりハイブリッドと言いますか、昔ながらのものもいいなって思ったりします。

健康面で言ったらですね。うちの子供は最後、卒業式に出たんですけども。来賓席から見ていて気付いたことです。視力も当然悪いんですけど、それがあれだけタブレットを家で使っていればっていうのもありますね。本を読むんじゃないんですけど。横から見たら、うちの子スマホ首と思って驚きました。私も気づいていませんでした。だいぶスマホ首になっていました。そういうのも影響してくるかもしれないなって思いました。本当に専門的なことも何もわからないんで、現状と感じたことを見たままのことだけになりましたけども、私からは以上です。

飯村委員

熊本県立大学の飯村です。現在、大学全体の教育・研究・事務のDXを担うデジタルイノベーション推進センターのセンター長を務めつつ、総合管理学部の情報専攻で教育・研究を行っています。私は、教育畑ではなく、知能情報学を専門としています。昨今注目されているニューラルネットワークや生成AIとは一線を画し、一見すると人間よりも下等と思われる社会性昆虫の行動、つまりビヘイビアを数理モデル化し、数学的には実用時間で解が得られないような複雑な問題を解くアルゴリズムなどを研究しています。

そういったことをやっていく中で、研究室に溜まった知見やスキルをア

ウトリーチとして子供たちに還元してきました。当時、東京や関西にはプログラミング塾が多数ありましたが、九州にはまだ少なかったため、ワークショップを通じて子供たちに学びの場を提供してきた経緯があり、その繋がりで教育分野にも関わらせていただいています。

先ほどの自由討議の中で、全国学力学習状況調査の結果から、数学の学力が低下しており心配だ、という補足説明がありました。しかし、デジタルデバイスと学力の関係性を考える際、私たちは今、どんな学力を測定しているのかを、今一度見直す必要があるのではないかと考えています。多分、ここで測定されている学力は、思考力・判断力を問う現代的な内容にアップデートされてはいるものの、基本的にはアナログ時代の知識とスキルを駆使して問題を解く力を前提としているのではないのでしょうか。その定義に基づけば、ネットやデジタルに時間を割くことで、従来型の知識習得やスキルが低下し、結果として数値が下がるかもしれないと思います。しかし、社会における問題解決力は、それとは別物ではないかと思っています。何か良いアナロジーがあると良いのですが、例えば、自動車のない時代に自動車を手に入れた人々に対して、脚力が落ちた、と懸念することと、あまり変わらないのではないかと考えています。仮にデジタル環境が完全に消滅すれば、現代人は過去の人々より弱いかもしれません。しかし、旧来の学力が高い人と、デジタルの力を駆使できる人がいたならば、現代社会を生き抜く力や生産性の観点からは、どちらが真の生きる力を有しているか、ということだと思っています。

デジタルデバイスの導入が単純に成績を上げる・下げるといった短絡的な議論ではなく、何の学力が低下したのかを特定し、それがこれからの時代を生きる子供たちにとって本当に欠かせないものなのかを精査するフェーズに来ているのだと、調査データを見て強く感じました。

せっくなので、膨大な調査データを取っていただいているので、その分析方法についても一点コメントさせていただきます。資料 1 の個別最適・協働的な学びの充実に関するグラフ等において、全国平均と熊本市の数値を比較し、微増・微減を評価されている箇所がありました。例えば調べる場面などで数値が下がっている場合、単に低いから改善が必要だと判断するのではなく、その差に統計的な有意差が認められるのかどうかを厳密に見極める必要があると思います。統計的な裏付けを持って結論を出していくことが、今後の施策において重要だと思いました。

また、資料 2 の書く力が落ちたという懸念についても同様です。これが、筆圧や文字の綺麗さを指すのか、あるいは文章構成能力を指すのか、現時点では判然としないというお話がありました。私は、それが不明確で

<p>前田副委員長</p>	<p>あると分かったこと自体が、このアンケートの大きな成果であると捉えています。文字を書く力が落ちたとは具体的に何を指すのか。そして、それはこれからの世の中を生きる子供たちにとって、どの程度必要な能力なのか。このアンケート結果をネガティブに捉えるのではなく、こうした本質的な問いを深掘りするための良きトリガーとして活用すべきだと思って聞いていました。</p> <p>曖昧な懸念を明確な課題へと昇華させ、注力すべきポイントを特定していく。そうした前向きな発見が、このアンケートには数多く含まれているのではないかと考えています。私からは以上です。</p> <p>熊本大学で授業研究、特に ICT 活用した授業研究と、それから各県です。県をまたいで学校の校内研修とかに行き、先生方向けの研修をしたりしております。</p> <p>一番私が今日感じるのは、授業観のアップデートがいるなということです。私が一番気になったのはこれの今日の調査の中の児童生徒同士でやり取りする場面っていうのが、小学校は全国よりもいいんですけど、中学校は低いんですね。それからこの中学校、小学校もそうですけども、理解度に合わせて課題に取り組むというのはどちらも低いということなんです。要は個別に最適化された課題ですとか、そういったことを取り組むという機会が非常に少ないんじゃないかなっていうふうに思っています。</p> <p>これは生成 AI で作った写真ですが、私たちがずっと受けてきた中学校高校の授業の写真ですね。こんな感じだったと思います。それから小学校の時はだいたいこんな感じで、手を挙げている子が活躍するっていう授業だったと思います。じゃあその ICT が入ったら劇的に良くなるかっていうと授業が変わってないと、例えば、この子は動画を見てたり、この子はゲームしてたりとかいうことがあって、けしからんって話になるんですけど、そもそもこの授業そのものを見直していかなくちゃいけないって、そういうタイミングに来ているんだと思いますし、小学校の場合もタブレットが入っても結局、活躍する子が決まっている。勉強できる子とか話ができる子だけが授業を進めていくっていうことだったら、多分何も変わっていないんじゃないかなというふうに思います。ただ、授業が変わっていないというところが、私自身は、とても大きな問題だなぁというふうに思っています。</p> <p>要するに、子供たち一人一人が学んでいるのかってことですよ。勉強できる子だけじゃなくて、勉強苦手な子だとか、なかなか発言するのが苦手な子ちゃんと学んでいるっていう状況を作らなくちゃいけないという</p>
---------------	--

ふうに思っています。で、そのデジタル学習基盤っていうことを文部科学省は言っているんですけど、これは考えてみれば、ICT を活用して学習効果を高め、一人一人の特性や状況に応じた学びを実現する教室環境などで、そこを忘れてはいけない。今までの一斉授業にちょこっとだけ ICT を加えてもあんまり意味がないって私は思っています。

これはジョン・ハッティっていう研究者が書いた『教育の効果』っていう本の一節なんですけども、読んでみていただくとわかるんですけど、コンピューターを持っていたり、コンピューターを使ったりすることと学習成果との間に因果的必然性はないってことですね。使えば学習効果があるということはまずないということです。これはジョン・ハッティは、やっぱりこういう時に利用の効果が高まりますというに言っているんですけども、私自身が一番大事だなと思っているのは、その教師ではなく、学習者が学習をコントロールしている場合ですね。先生から言われてやっているうちは、あんまり効果はなくて、自分と子供たちがまさに自律的に学習を、自分たちで考えてやっているペア学習、協働学習ですとか、フィードバックをどんどん加えていく、そういった学習の時に一番効果が高まるということです。

これからの授業研究というのを考えたとき、私たちはずっとその 1 時間とか 1 単元の授業研究をずっとやってきたんです。教師側としてはですね。これはこれでとても重要です。指示、発問はどうするかとかですね。単元設計とかワークシートとか板書など。でも、これから必要になってくるのは、学習者を育てる授業研究、どんな学習スキルをどの時期にやっていくのか。そして、家庭学習と密接に関係があると思っていて、そういったことも考えていけるような研究・研修が望まれるんじゃないかなというふうに思っています。

いろんな学校を見ていて思うのは、小学校と中学校のどっちが進んでいるかという、私は小学校の方が進んでいるなというふうに思っています。端的にこれは全国的な傾向として。ただ小学校の強みは、学級担任制であることですね。教科横断的な授業がやりやすいということ、もともと活動とか体験を重視する学習文化がありますし、研究授業なんかも、校内研修の文化もほぼ盛んですね。中学校が結構難しいのは教科担任制で、どうしても教科が分断されがちだと、あとやっぱり受験学力を高めなくちゃいけないというプレッシャー。それから思春期特有のいろんな問題を起こします子供たちは。そういったこともあって、なかなかうまくいかない。でも、小学校もやっぱり課題があって、コピーアンドペーストで終わってしまったりするようなこともあって、やっぱり浅くなりがちだとか、ある

<p>大塚委員長</p>	<p>いは、これは小学校の場合、授業やってワークテストやって、授業やってワークテストやってっていう、年間を通した授業の復習みたいなことは、なかなかしにくっていう部分もあると思います。</p> <p>一方、中学校ですけども、子供たちの抽象感覚が高まっていますから、概念的な理解は非常にやりやすいですね。それから先生方が高い専門性をお持ちなんで、一旦教科の枠を超えて先生方が学び始めると、僕はすごく強みがあると思っていて、現実的に全国で中学校で授業改善している学校は本当に強くなっていくと、私自身は思っています。これから先こういった小・中学校の文化とか特性の違いを踏まえながらですね。研究あるいは研修をやっていく必要があるんじゃないかなと思っています。私からは以上です。</p> <p>飯村委員や前田委員は、令和元年から、この検討委員会にずっと参加してこられた方たちですので、熊本市の子供たちの現状や教育の現状等をよくご存知だと思います。今、前田委員からありましたように、ICT を使う教育をどう進めるかということだったかと思っています。論点整理にも出ておりますが、AI 時代における考えをどのように作り、よりよく生きるための教育というような質的な転換というのが、一番今求められているところではないかと思っています。</p> <p>熊本市では ICT 機器の整備を令和元年から積み上げてこられたところですので、基盤は盤石に出来上がってきていると思います。あとはそれにどう質的に、前田委員がおっしゃったように、教員サイドでいうと、やっぱり校内研修をどう進めていくかということではないかと思っています。</p> <p>私も実は、去年、甲佐中学校で校長をしておりました。その前は、熊本大学の大学院に 4 年間前田委員と教職大学院におりました。自己紹介ということで、昨年 4 月からですが、大学院教育学研究科技術科教育講座において、ご存知の通り、半導体関連が今 1 丁目一番地ですので、半導体リスクリングセンターという、いわゆる研修を高校の先生方と一緒に取り組んでいます。</p> <p>ただ専門は、教育学で、技術科教育の指導法研究が中心です。今お伝えしましたように、私は中学校の技術科の教員で、ここにおられる水田所長や勝田課長とか、堤先生は、技術のロボコンでは全国トップの先生です。毎年全国大会に子供たちを連れて行っていただいているのですが、そういう技術の先生は、技術を教えながら生徒指導をやっておられます。私も学校心理師のスーパーバイザーという資格を持ちながら、不登校など様々な子供たちの対応をしております。非認知能力の部分もしっかり支えなが</p>
--------------	---

ら、どう指導していくかということは今、研究をしているところです。

私からは、生活面のところで、先ほどから出ていますが、この資料です、家庭を端末の使用内容と使用時間のところです、パーセントで言うと、学校のある日ってというのが、3時間から5時間、7時間以上というところを見ると、小学校1、2年生で10.1パーセント。たった10パーセントかという感じかもしれませんが、10パーセントを何人だろうと計算してみると、6,290人となります。小学校1、2年生で3時間以上を使っている子供たちが、633人学校のある日で。それから学校のない日だと883人ということで、これは見過ごせない数字だと思います。

先ほど堤委員がおっしゃっていましたが、学校だけでどうにかしようと思っても、なかなか難しい。私が校長していた時もです。保護者の方や、こういう研修会とかが一緒にやっていたのですが、もっともっと抜本的向上という、情報教育の抜本的向上と言ってるんですが、もっともっと協力してやっていかないと、子供たちが安心して学習に向かうということができていかない。子供たちが自分で自分を調節していく力というのをしっかり、一緒になってつけていかないと、本当に厳しいところに来ていると思います。中学生になればなるほど、その率が高くなってきています。この点は、第2回でもぜひ一緒に考えていきたいところだと思います。

それからもう一つは、長期欠席者のことが出ていました。これはもう学習面だけで取り上げるだけではなく、生活面だけでも、健康面だけでもなく総合的にこれは取り扱っていかねばならないと思います。令和6年3月に公表された不登校生要因分析に関する調査研究というのがありますが、いわゆるきっかけです。なぜ不登校になっていくのか、というきっかけのところが示されています。この中に気になる質問が2つあるのですが、「あなたが最初に学校に行きづらい、休みたいと感じ始めた時、学校や家で次のような時に辛いと感じたことはありましたか。」という質問、それが一つです。もう一つが「居眠り、朝起きれない眠れない。」という質問です。教師は、あんまり意識してないのですが、不登校の児童生徒と不登校児童生徒の保護者は70%以上がこれ意識していくんです。この睡眠と、それともう一つ、ゲーム・スマホは、やっぱり関連性があるというふうに最近言っている人も、いらっしゃいます。

確かに視力等もあるのですが、不登校になった時の対応というのは別にあるのですが、その未然予防というところでです。このタブレット活用というのをどういう風にしていったらいいのか。ここのところは、今後また一緒になって、考えていく1つのきっかけになるのではないかとこのふう

<p>(事務局)</p>	<p>に思っています。</p> <p>以上ですが、時間となりましたので、この会は、第 2 回、第 3 回と続いていくというふうに、聞いております。第 2 回については皆さんの意見をもとに焦点化していった、第 3 回目では、なにか方向性をきちんと、示していけるような、特に現場の先生方に寄り添って、子供たちの実態をしっかりと見ながら、学校や地域の自治体で職員の配置の問題など、いろいろなことで差があると思います。そういったところに応じてどうこの ICT を活用していけば、学力の向上や、それから長期欠席者について取り組んでいけるのかということは今後考えていけたらと思います。</p> <p>それでは、会の進行を事務局にお返しいたします。</p> <p>委員の皆さまありがとうございました。</p> <p>ここで今後の会議日程をご説明させていただきます。令和 8 年度に 2 回の実施を予定しております。次回の開催は 7 月から 9 月ごろに、3 回目を 1 月頃の開催を予定しております。また後日委員の皆様には日程調整票をお送りいたしまして、調整の上開催日を調整したいと思いますので、引き続きよろしくお願いいたします。</p> <p>これで令和 7 年度第 1 回熊本市教育の情報化検討委員会を閉会いたします。委員の皆様ありがとうございました。</p>
--------------	---